

### 講演3. 濱 清 (生理学研究所名誉教授)

[濱] 「進歩主義の後継ぎ」というテーマをいただきまして、本当にどうしていいか分かりませんので私なりに考えを話させて頂く事にしました。テクノロジーの進歩はすさまじく、情報量がものすごく大きくなる中でいろいろな矛盾が出てきております。その矛盾に対応して、例えば私たちの孫とかひ孫とかの世代が幸福でいられるためには一体どういうことをしたらいいのだろうかと言う様な事をお話致します。

私自身は解剖学という分野に属して居て、顕微鏡を使って60年の間ただ構造を一生懸命見続けてきた人間です。解剖学は医学の基礎として大切な学問ですが、現在は形態学其の物がマイナーサイエンスと考えられていて医学部で解剖学という講座が無くなって居る所も多い有様です。しかし、人間の体の構造を知らないお医者さんに診察してもらいたいと思いますか。だれもそうは思わないでしょう。解剖学に限らず、全ての学問の分野で大切な基礎分野をマイナーと言って無視せず大切に教え伝えて行く事が人間の文化にとって大切だと思うのです。学問分野に限らず落ちこぼれと言われる社会の裾野まで目を配って大事に育てて行くという視点が必要なのではないかと考えて居ます。

今一番問題になっていることと申しますと、テロ、ゲリラ、戦争などいろいろな名前がついておりますが、世界中至る所で人間同士の殺し合いが起こっています。もう一つの問題は南北問題を始め国内でも色々な面で大きな格差ができています。その2つのことを取り上げたいと思います。

私は先ほど60年間解剖学をやってきたと申しましたが、その間に会った心を打つ3つの言葉をお示しします。

第1は“Beauty is truth, truth beauty” That is all ye know on earth, and all ye need to know. この言葉は解剖学の教室に入ってすぐのころ、教授の石沢先生から教えて頂いたJohn Keatsの言葉です。これは形態学を学ぶ私にとって今でも大切な指針です。また単に生き物の形の美しさだけでなく、自然を支配する美の原則を教えられたのだと思って居ります。たしかこの大学院大学で私が定年で退官するときの記念講演でこのことをお話させて頂いたことを記憶しています。

第2は To travel hopefully is better than to arrive. これはRobert L. Stevenson の言葉で、私と親交のあった生理学者、Stephan Kuffler教授は此の言葉で最終講義を締め括られたと聞いています。形態学研究にゴールは無いと思っていますので何時も心の支えになって来ました。

人生の終わりに近くなった昨年、第3の言葉に出会いました。

Our planet's immune system is trying to get rid of people

「地球の免疫システムは人間を排除しようとしているらしい。地球の立場から見るともっともな事だ」と言う様な意味の言葉で、Kurt VonnegutがA man without a countryと言うタイトルで1955年に出版した最後の随筆集の中に書かれています。彼は1922年11月生まれなので、1923年1月生まれの私と小学校では同級生に当たる年齢の人でしたが、現在の私は彼と殆ど同じ様な感じで世の中を見えています。カートボネガットは第二次世界大戦の終戦に近いころ、ドイツ軍の捕虜になり、正義の味方のはずの連合軍による無差別爆撃によって一夜に14万人のドイツ市民が焼き殺されたドレスデン空爆を体験し、非常に強い衝撃を受けています。有名な「スローターハウス5」は彼のこの体験を基にして書かれたものです。私はちょうどそのころ、医学部学生として福岡空襲による被爆者の治療、次いで長崎の原子爆弾被爆者の救護活動に参加して原子爆弾攻撃の惨禍を体験し、終戦後は外地からの引揚げ基地となった福岡でフィリピンから引き上げて来た沖縄県民の難民キャンプで飢餓とマラリアに苦しむ人達の治療に当たりました。これらの経験を通して数えきれない程多くの市民達の戦争による死を体験しました。同じ年令で同じようなことを経験したことが今の年令になって同じような感情を持つことになった根底にあるのではないかという気がします。

同時にカートボネガットはその本の中で、100年先の人間にまだ笑顔が残っているのを見ることができたら、自分は非常にうれしいと言っています。私も現在は孫とかひ孫とかにあたる、100年先の人たちに幸せな笑顔が見られるためには一体どういうことをしたらいいのだろうかと考えています。

そこで、さっき申しました2つの問題、差別と戦争について此の視点からお話して見たいと思います。

まず格差について。

小学校のころ、カタカナで書かれた『アンクル・トムズ・ケビン』という小説を読んで、奴隷というのは本当に哀れなものだと思って涙を流した記憶があります。現在、何処の国でも奴隷制度は表向きには無くなっていますが、南北間の経済格差は非常に大きいし、国内でも非常に大きな経済格差があり、身近な所でもたくさんのホームレスあるいはワーキングプアと呼ばれる人たちが生活しているのが見られます。

私が経験した国立大学での例を見ますと、法人化以後、小さな政府と言う名目で正規の職員の定員を減らし、アウトソーシングと称してパートタイムの職員に置き換えることが始まりま

した。全国の企業も正規職員の数を減らして、不正規職員に切り替える事、所謂リストラを行いましたので、現在国内には莫大な数の人たちが臨時雇いの劣悪な労働条件で働かされています。つまり大学の改革も企業の体質改善も実は正規職員を減らし、それを低賃金で身分保障の無い雇用に切り替える口実だった訳です。

それだけではなくて外国から職業教育と称して入れた沢山の人たちが低賃金労働者として働かされています。その人たちの実態は、言葉は悪いけれどもほとんど奴隷に近いような状態であることが報告されています。

不安定な雇用の状態は若い人の世代に広がって、多数のニート、フリーターと言われる人達が生まれました。彼等には働く意欲が無いと思われていますが、実際は働きたくても安定して働く職場が無い人達が多いのが実状だと言われています。この辺りの事情は生田武志氏の『最低辺』というレポートに詳しく書かれています。

私は大学院の学生と話をしている初めてネットカフェあるいは漫画カフェというのを知りました。職が無くなり、アパートを追い出されて行くところがなくなった人にとってネットカフェでは寝ることができる。それはほとんど野宿に入る一つ前の状態です。そういう人たちが学生達の身近にたくさん居ることを聞いて驚きました。住む家が無ければ住民票を申請できません。住民票がなければ住民としての権利は全く保障されないわけですから、実際は奴隷に近い状態になります。そういう若い人たちが沢山居るといのが現実なのです。

本日は皆さん理科系の方なので理科系の研究者の実情は良く御存知だと思うのですが、現在研究費は競争的資金として全部自分で稼ぐことになっています。競争的資金は投資効果が出やすいと見える所に重点的に配布されますので、直接応用に繋がらない基礎研究の分野への配分は少なく、日の当たる分野と日の当たらない分野の差が画然と分かれています。現在はこの配分法が旨く行っている様に見える点もありますが、それだけでは新しく世界の科学をリードする分野の芽を育てることは出来ないでしょう。日本のサイエンスの将来が心配です。

次に問題なのは法人化後事務量が異常に増えたことです。科学研究費に限ってみても申請書、報告書、成果を世間に還元するための公開の講演会、あるいは国際的なシンポジウム計画など非常に多くのことが要求されています。外国の場合には此れ等の事務のためには非常に有能なセクレタリーが配置されていますが、日本の大学では殆ど教授が自分でやっています。非常に気の毒なことであります。然しこれは比較的豊かな人達の話です。

小さな研究資金しかもらっていない人たちはもっと悲惨です。資金の時期が1年か2年と非常に短いのです。そうすると、のべつに申請書と報告書を書いている事になります。しかも次

の申請書を書くためには実験をして論文を書かねばなりません。だから、いつも忙しい、時間がないと振り回されています。私は生理学研究所の自由研究員として研究室の中に机を置いて仕事をしておりますので若い研究者達の現状が非常によく分かります。大学共同研究機関なので全国からいろいろな研究者が来られます。そういう人たちと一緒に昼の弁当を食べたりするので日本国内で基礎研究者達が置かれている状況が非常によく分かるのです。そんなに忙しく追い回されていて、考える時間、そしてアイデアを育てる時間はあるのだろうかと思います。それだけではなくメンタルな健康、フィジカルな健康の面でも本当に大丈夫かなと思う面が多くて、実際に脱落して行った人たちの話も聞いています。

大きな研究費をもらった方からは非常に立派な報告書が贈られて来ます。研究所の入り口にも大学の入り口にも、色んなシンポジウムの立派なポスターがいっぱい張りだされていますし、国際誌にも多数の論文が掲載されています。問題は本当にその研究の成果が非常に高いレベルなのかという点に少し疑点があることです。その一つの原因は、例えばアメリカではポストドク以上の人たちのグループでやった研究の論文が多いのに対して、日本の場合はドクターコースの学生の論文が多いので、分野によっては質の差が出る原因のひとつではないとも言われています。

更に大事なことは、投資効果を上げる事と投資の期間を短くする事を混同してはならないと言うことです。アイデアにしても人にしても育てるためには時間がかかります。時間をかけなければ良い人は育ちませんし良いものはできません。つまり投資の効率は上がりません。塩谷先生は10年間データが出なかったとおっしゃいました。それでもこの人はやるよと思って安心してやらせたから大成されたのです。

現在の豊かな研究グループが抱えているもう一つの問題は多数のポストドクや非常勤の職員が研究を支えている事です。その人たちの将来は一体どうなるのでしょうか。法人化後の日本の大学、研究所にはポストドクの受け皿はほとんど用意されていません。非常に優れた人は良いポストに引き抜かれますが、残りのたくさんのポストドクたちの将来は非常に暗澹たるものがあります。

その事を問題にすると、必ず「好きで研究を始めたのだから自分の責任だよ」との返事が帰って来ます。たしかに研究者になりなさいと強制したわけではありません。然し、若い人達が自発的に研究を続けるためには或る程度の公的な経済面でのサポートが必要だと思います。昼食を一緒に食べていますと、若い研究者達の生活の質素さが可哀そうになります。テレビ等で見る食事はものすごく贅沢ですよ。それに比べて大学院学生やポストドクの食事は本当に

質素です。こんな事は彼等と一緒にいるから分かることです。

貧しさといいます、必ずしも給料が少ないことだけが問題ではないのです。私が助手になって初めてもらった給料は3120円でした。1ドル360円でしたから、月額8.6ドルです。10ドル以下です。これは極貧だったと思います。それでも元気に仕事をしていました。最近早石先生からお話を聞きましたが、先生の場合の給料はひと月60円で、17セントだったそうです。それでも先生は見事な研究を成し遂げられました。

その理由は何故でしょうか。戦時中のいろいろな拘束がなくなり、放り出されたために或る意味で非常に自由だったことと、もう一つは、世の中は非常に暗い状態でしたが、はるか彼方にはかすかではあります。明るい希望が見えた事だと思います。それに引き換え、現在の若い人たちの研究環境には精神的にも制度的にも、自由が感じられないこと。法人化で自由度が増すと言われましたが、実際には資金を押さえている官庁からの余計なお節介と干渉が非常に多いのです。そして、いつまでたってもポストクの繰り返しとか、年限が限られたポジションとかで身分的に将来の展望が感じられない人達が多いのです。

此の二つは一種の弱い者虐めであって、中年も含めて底辺を担う研究者達の活発な展開の大きな障害になっている様に思います。其れ以外にも現在の世の中には格差と陰湿な弱い者いじめが横行しているように思われてなりません。

サバンの自然界は弱肉強食の世界ですが、人間の世界に弱肉強食を絶対に持ち込んでほしくないというのが人類文化での最低限のルールではないかと思っております。100年後に子供が笑っているために私達人間がなすべき事は、絶対に弱い者いじめをしない。人にもさせない。弱い者や若い人たちに時間を与えて育つのを待つ。そういう文化を作ることではないかと思っております。

次は戦争の話になります。これもフォーラムの話題としては非常に具合の悪いことのような気がしますが、避けては通れないことだと思いますのでお話しいたします。

地球上で人間が生き残るために絶対にやってはいけないことは核戦争です。

あとでお話ししますが、私が医学部の学生だったころ、非常にたくさんの市民が戦争で殺されるのを見ました。死体が山積みになっているのをこの目で実際に見ました。だからボネガットがドレスデン空爆のことを書いた『スローターハウス5』、あるいはスペイン人ホセ・センプトンが『ブーヘンバルトの日曜日』という小説の中で書いた、ユダヤ人の死体が積み重ねられている死体置き場の鬼気迫る状況を読んだ時その状況を実感することができました。然し戦争を全く知らない世代の人たちには、そういう情景を読んでもフィクションとしか感じないの

ではないでしょうか。イラク戦争でのミサイル攻撃をテレビで解説している人は「シナリオ」という言葉を使って戦況の説明をしています。ミサイルのターゲットは人の命です。そこでは人が死んでいるのです。逃げまどっている人、恐れている人、怒っている人が居るのです。解説者にはそれをイメージする能力が全く無くて、映画を見ているのと同じ感覚しか持てないのだらうと思います。

一番怖いことは、そんな程度のセンスの人が自分の国を守る事ができる普通の国にするために憲法を改正するという話を持ち出している事です。非常に恐ろしいことだと思います。改正の議論をする前に、軍備とは何か、戦争をするとは国民にとって何を意味するのか、誰が戦場に行くのか、など9条が持つ意味、その改正が何を意味するかをちゃんと議論する必要があると思います。それだけを前置きといたします。

私は木を切るのが大嫌いです。どんなに大きな木でも自分で意思表示をすることもできないし、逃げて行くこともできません。全く無抵抗な木を自分勝手に切り倒す、これは人間の弱い者いじめの極致だという気がするので、木を切るのが嫌いなのです。

私は木を育てる仕事をしようと思っていましたので、大学は林科に入るつもりでした。森を見るのが好きで、九州の山々を歩きました。そこで見たのは何百年も生きて来ただらうと思われる大きな木が営林署の人夫達によって片端から無造作に切り倒されている事でした。それを見て林業は木を生かし育てる仕事ではなく木を切り倒す仕事だと知り、林科を止めて医学部に行きました。

ところが医学部を選んだために、それは私の宿命だったと思いますが、1945年6月19日のB29による福岡空襲の時、火傷患者の収容と治療の手伝い、さらに死体の火葬の手伝いまでさせられました。この空襲では1,000人近くの市民の焼死者が出ました。8月9日には長崎が原爆攻撃を受けたので、九大の救護班に参加して被爆直後の長崎に行き、約3月の間滞在して原子爆弾被爆の惨状を実際に経験しました。1945～46年には広島と長崎を含む日本中殆ど全ての都市が空爆を受けましたが、これらの攻撃で殺されたのは殆どが老幼婦女を含む市民でした。ですから、戦争は兵隊だけではなく市民も殺すのだという事を骨の髄迄教えられましたが、実は日本も重慶、漢江などの中国都市に対する爆撃で同じ事をやっていたのだと言う事がそのとき初めて本当に分かりました。

その次にもう一つショックだったのは731部隊の事件です。満州で中国人の捕虜を使って人体実験をやり、数千人を虐殺しています。しかも、この事件には多くの医師、さらに有名な医学教育者が多数の関与した事が知られていますが、政治的な理由から東京裁判では裁かれませ

んでした。

さらに止めを刺したのが私の母校の九州大学で起った生体解剖事件です。北九州空爆の際に撃墜されて捕虜になったB29搭乗員のアメリカ人を九大の医師が生体実験に使って殺しました。この二つの事件で、戦争は兵隊と市民を殺すだけではなく、市民が殺人者になる。人間であつたはずの医師が野獣になる事を示しています。此の様な経験を経て戦争は絶対にしてはならないと思うようになりました。

ほとんどの戦争は正義の為の戦争だと言われています。しかし、実は、どの戦争にも胡散臭い裏の事情があります。最近中近東で起こった戦争は、石油と天然ガスの資源の獲得が原因だと言われている。あるいはウラニウム、白金などの稀金属資源獲得のための戦争があります。それだけではなくて、戦争に使われる武器にはすごくお金がかかり、巨額の国費が注ぎ込まれますので、武器をこしらえて売る企業、商社にとって非常に大きな金蔓です。武器の商人或は死の商人たちが今まで非常にたくさんの正義のための戦争を企んで来た事は良く知られています。

そういうのは偏見だとおっしゃる方もいますが、明治、大正、昭和の時代に活躍した尾崎巒堂という政治家は、日本が中国とアジアで行った解放のための正義の戦争というのは実は鈍盗、後からやってきたのろまな盗人行為だと言い切っています。日本にも昭和の始めまではそういう正確な視点があつたことをお伝えしておきたいと思います。

次に長崎の話に入ります。

1945年8月6日、広島に原子爆弾が落とされ、8月9日には長崎にも原爆が落とされました。その凄まじい破壊力から原子爆弾だということは明らかでしたが一般の人は特殊爆弾と聞かされていきました。

長崎に特殊爆弾が落とされ、死傷者がたくさん出ているが長崎医科大学は完全に壊滅して、長崎には医者が居ないと伝えられたので、九大から外科の医局員と4年生を中心にした救護班を送ることになりました。11日の夜に博多駅から出発するという話を聞きましたので、3年生だった私と友人の平野君の2人は参加を希望しましたが、切符がないからと断られました。駅長さんを説得して切符を手に入れ、何とか列車にもぐりこんで長崎にたどり着いた訳です。

12日の朝汽車が長崎の谷に入ると何も無い瓦礫の世界が広がって居て、谷を取り巻く山々はてっぺんまで焼け尽きて一片の緑も見られません。私は地獄に行ったことがないのですが、正に地獄に落ちた様な気がしました。太陽だけがギラギラと強く照りつけていたのを思い出します。浦上の近くで汽車を降り瓦礫と屍体の道を諏訪神社の山陰にある救護本部まで歩いて行きました。

途中には焼けてしまって丸太みたいになっている死体が無数に転がっていました。既に腐敗して大きく膨れて顔の見分けも付かなくなった屍体も沢山ありました。屍体にはウジがわいています。電車の中には座ったまま、一部は焼けて骨になった屍体が並んでいました。川には腸が出た死体が流れています。川岸にもいっぱい死体があります。この屍体たちは瞬時に殺されてしまって、死んでいることさえ知らないのではないか。ここにある屍体達は既に人の亡骸とは思えない。この世のものとは思えない凶悪な死に身震いが止まりませんでした。こんな殺され方をした人はもうすでに人間でなくなっています。殺した人間もとても人間とは言えない。人間を人間でないものに変える戦争とは一体何なのか。人間に突きつけられた重たい問題だと思います。

壊れた工場では爆風に飛ばされた鉄板が紙くずの様にくしゃくしゃになって鉄骨に絡み付いていました。

爆心から500m位の所にある長崎医大の病院は鉄筋コンクリート作りでしたので形を残して居ましたが、基礎の建物は木造なので完全に焼け尽きて多くの学生が爆死されたと言われて居ます。

私たちが救護活動をしたのは爆心から600mぐらいの距離のところにある山里国民学校でした。山里の丘に上がっていく途中には至るところに屍体を焼いた跡があり、骨が残されていました。国民学校は3階建てのコンクリートの骨組みだけが瓦礫の中に立っていました。爆風でガラスは全部吹っ飛び、床板も剥がれて居ましたが、床板を並べ直し、その上に筵を敷いて負傷者達を収容しました。焼け跡から見つけ出した机を玄関に並べて治療を始めましたが、治療といっても、ほとんど火傷ですから、火傷には亜鉛化軟膏を真っ白に塗ります。体中にガラスの破片が刺さっていますから、それを抜いて、その傷跡を消毒する。あるいは心臓が弱っている人には強心剤を打つ。痛んでいる人には鎮痛剤投与するという程度の応急処置しかできません。それでも日が暮れるまで負傷者の手当を続けました。電気も蠟燭もありませんから夜は宿舎に帰ります。次の朝に行ってみると夜の間に苦し紛れに這い出してきて息絶えた人達の屍体が廊下、階段、診察室のテーブルのまわりにもたくさん転がっていました。

多くの人が血便を出し、看護する人も無いので血便にまみれながら死んで行かれました。始めは赤痢を疑い消毒に務めましたが、被爆のため消化管の上皮とリンパ組織が壊されたためだと分かりました。亡くなった方を消防団の人達が担ぎ出し、焼け跡から集めて来た材木で焼きました。人手が足りませんから山のように死体を積み上げます。それが腐って臭いを出し、蛆に食われていました。



周りの谷間でも郊外から手伝い来た人たちが死体を集めて焼いています。死体が焼けると何とも言えない臭いがします。その臭いが辺り一面に漂い、私の体にもその臭いが染みついて一生抜けないのではないかと思います。

そんな状況の中で8月15日を迎えました。天皇の放送はラジオがありませんから知りませんでした。目の前では被爆者が次々に死んで行きました。夕方になってアメリカ軍のマイクやピラで全面降伏だということを知らされましたが、半信半疑でそのまま治療を続けました。私達にとっても患者さんにとっても、原爆症との闘いは始まったばかりで、終戦なんてありませんでした。

夕方になって救護センターのある市役所に帰って戦争に負けたのだということを聞いた時、今までに虚しく死んでいった人、今も目の前で苦しみながら死んでいく人、そういう人達の苦しみと死は一体なにだったのか。この虚しい苦しみと死が戦争というものの実態だったのだと思ひ、涙が止まりませんでした。長崎の町を泣きながら歩いて宿舎に帰った日の事を忘れません。

山里の救護所で忘れられないもう一つの情景があります。山里国民学校の直ぐ近くに有名な浦上の天主堂がありました。ですから、付近の人はほとんどカトリックの信者です。収容されている人の大部分もカトリックの信者でした。夕方になると動けない程弱った人までみんなで抱き起こして夕べの祈りを捧げます。ガラスの無い窓から差し込む夕日の赤い光の中に祈りを捧げる人達の姿がありました。その人達も次々に死んで行かれました。言いようも無い悲しみに打たれると同時に、信仰を持たない私は、信者をこれほどむごい目に遭わせることを許しながら、なお祈りを捧げられている彼等の神様に対して怒りを感じたのを憶えています。然し今では、すべてを奪われてしまった人間が神に祈りを捧げている姿に人間の最後の尊厳の姿を見たのではないかと思います。

8月の終わりには私達が診た人達は殆ど死んでしまわれ、山里の救護所は閉じられました。私達は市役所の近くにある新興善国民学校の救護所に移り、そこで2か月間診療を続けることになりました。そこで体験し、強いショックを受けた恐ろしい原爆症のお話をします。

9月末になりますと、酷い火傷など原爆の直接傷害を受けた人達は死んでしまわれましたから、被爆者の症状は脱毛以外には比較的落ち着いていました。

ところが、それまであまり傷がなくて元気だと思っていた人の手足に突然赤い小さな点状の皮下出血が起ります。それが2 - 3日のうちに40度を越す高熱を伴いながら全身に広がり、其れに続いて酷い鼻血が起り、口から血を吐き、血便を出し、どんな止血処置を施してもどうしても出血が止まりません。高熱と痛みと苦しみにながら4、5日の経過で例外なしに死を迎えま

す。人類が初めて経験した原爆症だったのです。

周りの人達を次々に襲う恐ろしい症状と死に怯えきった被爆者たち、どうか助けて下さいと  
拜む様にすがる被爆者達を前にして、私達は何一つ有効な手だてを持ちませんでした。全ての  
人が生き延びたいと願いながら、例外無く同じ経過を辿って死んで行かれました。私は自分の  
無力さに歯噛みをする思いでした。山里で地獄を見たと思いましたが実は、地獄の入り口でし  
か無かったことを思い知らされました。この修羅場の中で私は命の尊さを教えられたと思っ  
ています。

すでに病理解剖が始まっておりましたので見せて頂きましたが、腸では上皮とリンパ節が全  
部破壊されておりました。山里で見た血便はこの為だったと納得出来ました。また、骨髄も完全  
に破壊されてどろどろになっておりました。造血組織がこれほど完全に壊された人はどういう処  
置を施しても生き伸びることはできないことが分かりました。

嵐の様に被爆者を襲った原爆症の発症も10月末になると収まり、医師達の復員によって長崎  
の医療体勢も整いましたので福岡に帰りました。爆心の近くの稲田は原爆で全部焼けてしまっ  
ていたのですが、その頃には残った根から稲が芽生えていて、しかも弱々しいながら穂がつい  
ていました。それを見たときに、原子爆弾を使って人間が全部死んでしまうような愚かな事を  
しても地球にとっては痛くもかゆくもない歴史の反復に過ぎず、地上には別の生物が生きてい  
くだろうと強く感じました。

ちなみに長崎に落とされた原子爆弾は広島のもそうですが、TNT爆薬に換算すると2万  
2,000トンに当たります。日本への空襲に使ったB29は5トンの爆弾を積んでいましたから、  
4,400機のB29の爆撃を一度に受けた事に相当します。水素爆弾は15メガトンですですから、広  
島、長崎の原爆の約1000倍近い威力です。そんなものを本当に落とされたら人間は生きて行け  
ません。私達日本人は特殊爆弾がピカッと光ったら防空壕に逃げる様に教えられていましたが、  
そんな生易しいものではない事を長崎で知りましたので、防空壕なんて馬鹿みたいなものだと  
思っていました。アメリカに行ったらシェルターが至る所にありました。アメリカの連中は原  
爆を沢山持って居ながら、原爆の恐ろしさが全然分かっていないのだと思いました。

100年先に子供たち、孫たちが元気で笑ってられる世界にするためには何をしたらいいか。  
戦争に向かう道を絶対に開いてはいけない。弱い者いじめをしない、させない。弱い人が育つ  
ことができる時間をゆっくり持つ、そういう文化を作らなければいけないのではないかと思っ  
ています。(拍手)

[高 畑] 先生、ありがとうございました。

## 濱 清氏の講演についての討議

[濱] 私は20年位前に班会議で長崎へ行きました。その時、原爆記念館に行ってみたら、展示写真の中に、貧血の検査をするためにピペットで耳朶から採血している私の写真を見つけました。髪の毛が全然在りませんが島田さんという少女だったと思います。(スライド)

当時は食べ物といえはおむすび一つで、野菜などは一切ない。塩もない。私達学生は何とかしなければと消防署に頼んで消防車を出してもらって海水を汲んできて、近所のお百姓さんから貰って来たさつまいもの葉っぱをゆでて配りました。市役所と交渉して、屠殺場から豚の肝臓をもらってきて、それを配ったりしていました。

福岡に帰ってみると、福岡は大陸からの一般市民の引き揚げの基地になっていました。一番悲惨だったのはフィリピンから引き揚げてきた沖縄の人たちです。その人たちは沖縄に帰れないので福岡近辺の2つの難民キャンプに収容され、マラリアと餓死寸前の飢餓に苦しんでいました。医学部と女専の学生グループはそこで次の年の9月まで診療をやりました。

其所には多くの孤児たちも居ました。(スライド)

1946年9月にこの人達をアメリカからもらった上陸用船艇LSTに乗せて沖縄まで送って行きました。確か、与那原と言う所だったと思いますが、全てが焼き払われ、鉄条網の中に米軍のかまぼこ兵舎だけがある所でした。

私の学生生活とはそういうものでした。医学の勉強は余りしませんでした。

[高 畑] 時間が過ぎましたけれども、濱先生は早くお帰りならなければいけないので、ここで延長させていただいてご質問を受けたいと思います。

濱先生の良心をお聞かせいただいたような気になっております。

[濱] 良心と言う程の事では御座いませんで、ただ見た事、感じた事をお話しましたんで、このテーマに合うかどうか極めて心もとなく思っております。

[廣 田] 本フォーラムは人間的なことを対象にしておりますから。根源的な問題です。

[濱] これは実は早稲田大学で、そのころは脳死時点からの臓器移植が始まったころで、生命倫理という言葉が良く使われていた頃です。日本人はどちらかといえば生命倫理の観念が欠けているから臓器移植ができない。病人の立場で考えてみると一日千秋の思いで手術を待っている。それを忘れてはいけないという視点から医師である私に生命倫理の講義をやれと言われました。私はちょっと待ってくれ。臓器移植に使われる健全な臓器は多くの場合、若い人が交通事故に遭って出てきた臓器なのだから、一日千秋の思いで人が死ぬのを待っているのか。患者

さんの気持ちは分かるが、周りの人間が一日千秋の思いと言うのは控えて欲しい。と言う事で沢山の死んで行く人を見た立場から命の尊さの話をしました。この講義録を短くして英文にしたのがBangor Daily News の広島原爆60年特集に掲載されたこの記事です。この新聞は ニューイングランドの地方紙ですが、アメリカ国内に比較的広い読者層を持って居ます。アメリカの物理学者、Murray Peshkin博士が此の記事を読まれて心を打たれたとの手紙を呉れました。彼は物理の学生の頃才能を買われてマンハッタン計画にピックアップされた方です。同じ年代の学生がアメリカでは原爆をつくる計画に参加し、日本人の私は原爆被爆者の救護をした訳です。彼は2005年7月24日のシカゴトリビュン紙にマンハッタン計画の非常に正直な記録を書いています。もしご興味がありましたら送っていただきましたのでコピーを差し上げます。

[高 畑] 清水先生は戦争と平和というプロジェクト研究をしまして、長崎、広島のアークाइブのデータを今整理しなければいけないということで活動しておられます。ちょっとご発言を。

[清 水] またあとで。

[高 畑] そうですか。

## 瀧 清氏の資料

新興善国民学校の救護所で、貧血検査のため少女（島田さん）の耳朶から採血する学生時代の私。40年後に初めて原爆資料館を訊ねた時展示されていたのを見つけた。

戦後フィリッピンから引き上げてきた沖縄の人達の中には孤児たちが沢山いてマラリアと飢餓に苦しんでいた。今も世界中にこんな子供達がいる事を思うと心が痛む。

Bangor Daily News, August 6-7, 2005所載